

第二部 一葉の真実：樋口一葉の可能性〔含 質疑〕

著者	田中 優子
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	72
号	3
ページ	47-92
発行年	2004-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/1831

法政大学多摩キャンパス開設20周年記念 経済学会講演会の記録

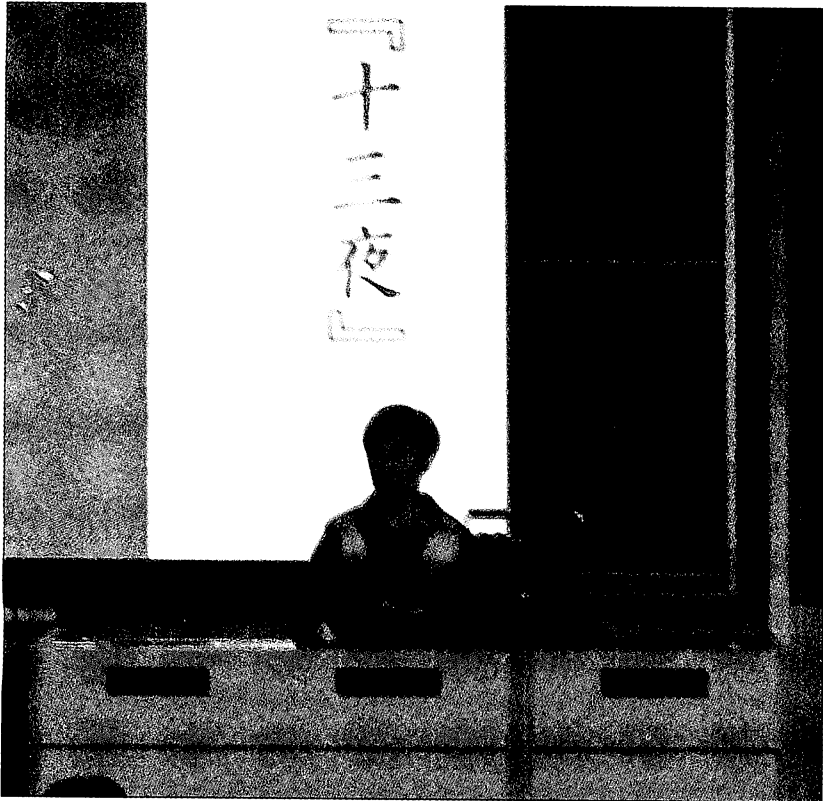
第二部

テ ー マ：「一葉の真実——一葉の可能性——」

講 師：法政大学社会学部教授 田中優子氏

開催日時：2004年11月8日（月）15：10～

場 所：経済学部棟201教室



プログラム

開	会
経済学部長挨拶	
講 師 紹 介	
講	演
質	疑
閉	会

講師紹介

法政大学社会学部 田中 優子教授

略 歴

1952年横浜生まれ。近世文学（江戸時代の文学）を専攻するが、その後、研究範囲は江戸時代の美術、生活文化、海外貿易、経済、音曲、「連」の働きなどに広がってゆく。さらに、中国文学を中心に東アジアと江戸の交流・比較研究、布や生活文化を中心にインド・東南アジアと江戸の交流・比較研究などにおよんでいる。江戸時代の価値観から見た現代社会の問題に言及することも多い。

履 歴

1974年	法政大学文学部卒業
1980年	同大学院博士課程修了と同時に、法政大学第一教養部・専任講師就任
1983年～	第一教養部・助教授
1986年度	北京大学交換研究員
1991年～	第一教養部・教授
1993年度	オックスフォード大学在外研究員

2003年度～ 法政大学社会学部教授（移籍）

主な著書

- 『江戸の想像力』（筑摩書房・1986年度芸術選奨文部大臣新人賞）
『江戸の音』（1988河出書房新社）
『近世アジア漂流』（1990朝日新聞出版局）
『連・対話集』（1991河出書房新社）
『江戸はネットワーク』（1993平凡社）
『江戸百夢』（2000朝日新聞出版局・2000年度芸術選奨文部科学大臣賞，
2001年度サントリー学芸賞）
『江戸の恋』（2002集英社新書）
『樋口一葉「いやだ！」と云ふ』（2004集英社新書）

翻訳（共訳）

- 『大江戸視覚革命』（1998作品社）
『大航海時代の東南アジア I・II』（2002法政大学出版局）

主な共著

- 『クラブとサロン』（NTT出版），『変貌する家族』（岩波書店），『世界
都市の条件』（筑摩書房）
『日本の近世11』（中央公論社），『東アジアと仏教文化』（春秋社），『大
江戸ボランティア事情』
『大江戸生活体験事情』（講談社）

現在の研究

メディア社会学科での専門：日本近世文化・アジア比較文化

開 会

司会者 お待たせいたしました。今日はお忙しいところをお集まりいただきましてありがとうございます。法政大学多摩キャンパス開設20周年記念講演会として、今回は経済学のほうで、「日本経済再生と東京」という都市論と経済学についての講演を八田先生に講演していただいたわけですが、今回は文学のほうです。皆さん、5000円札の新札はご覧になりましたでしょうか。樋口一葉さんの肖像が使われて非常にブームになっておりますけれども、樋口一葉という作家は、ブーム以前にブームなんです。明治生まれの女流作家、24年の短い生涯ですけれども、近代、新しい文学を作り上げて、いまだに大きな影響を与えています。今年度上半期の芥川賞で若い女性2人、綿矢りささんと金原ひとみさんが受賞されましたけれども、その先駆という方です。

その樋口一葉について今回は本学の社会学部田中優子先生に講演をしていただきます。田中優子先生は編集者時代からよく知っているんですけれども、江戸学を中心に研究されている方です。デビューされた本が『江戸の想像力』、私は書評紙の編集者でしたけれども、こんな新しい江戸の解析、江戸の豊穡な文化の紹介をされる学者先生がいるんだと、出版界でものすごく話題になったのを記憶しています。その方が江戸から樋口一葉という作家を照らし出してみる、そうしたら全く新しい顔が浮かび上がってきたんです。最近、先生が『樋口一葉「いやだ!」と云ふ』という本を集英社新書から出されましたけれども、この本を軸にして一葉の新しさ、可能性について語ってもらいたいと思います。

講演の前に本学の経済学部長の鶴見誠良先生に一言挨拶をいただきたいと思います。よろしくお願いします。(拍手)

経済学部長挨拶

こんにちは、経済学部長の霧見です。この講演会は法政大学の経済学部、社会学部が多摩に移転して20年を記念して開かれたものです。早いもので、こちらに来てもう20年になるわけですが、ここに来た理由はさまざまあります。そのうちの一つの特徴は、それまで大学の教育というのは専門教育と教養教育というものが非常にはっきり分かれていました。2年間は教養をやって、3、4年になると初めて専門を学ぶというふうに横割りというんでしょうか、はっきり分かれておりました。そういうこともありまして、教養の先生と専門の先生との間にあまり交流がなかった。それを20年前に法政大学は打ち破ろうと、教養の先生と専門の先生との間の交流を進めて、そのなかからいいものを作っていこうということが一つの狙いでありました。

その試みは非常に先駆的で、そのあと文部省はそういう考えを取り入れて、いまや全国の大学は教養と専門が縦につながる縦割のような仕組みに変わりました。そういう意味で多摩でわれわれの学部がやった試みは、先駆的な試みだったわけです。

今日、田中優子先生をお招きして、樋口一葉のお話を願うわけですが、前回は八田達夫先生をお招きして経済学の観点から講演をお願いしました。われわれはいわゆる専門と教養をできるだけ交流したかたちで進めていきたいと考えております。その交点に20周年のメインコンセプトがありまして、それは「Well-being を求めて」ということです。Well-being というのはちょっと横文字でわかりづらいですが、よりよい生活を求めてというような言葉、概念であります。21世紀、よりよい生活をつくるにはどのようにしたらよいだろうかという問題、それは経済や政治だけではなくて文化やさまざまな問題が絡んでくるというふうに思います。このテーマで12月4日にシンポジウムを開きます。新しい Well-being をどう切り開

いてゆくか、その現状を議論いたします。ぜひこのシンポジウムにもご参集いただけたらと思っております。

私は経済学が専門ですが、経済学者の眼から見ると、おそらく日本の経済、生活というのは今がピーク、頂点だと思っております。ずっと明治から現在までほとんど、戦争を挟みましたが、ずっと上がり調子で来ました。100年超えて上がり調子で来ました、これからどうであろうか。このままずっと上昇を続けるかというよりも、おそらく下降をたどるだろう。どの程度の下降をたどるかはわかりませんが、今の学生諸君が20年後、30年後に思い描く生活というのは、現在の生活よりもおそらく下がっているだろう。ある種の不安と不安定な社会に直面をせざるを得ない、そういう状況におそくなるだろうと思います。そういう意味で江戸から明治という大転換のときと現在のわれわれは、ダブリます。大転換点でどういうふうに生きるかということが問い直されております。

私は樋口一葉の作品をたくさん読んでおりませんが、一葉が大きな転換のなかでどういうふうに生きたかということは、われわれにとって非常に興味があります。一葉について先だっておもしろい本を書かれました田中優子先生にお話を伺えるということを非常にうれしく思っております。おそらく大きな示唆を得てお帰りになれると期待しております。私の最初の挨拶はこれで終わります。(拍手)

講師紹介

司会者 ありがとうございます。ここで簡単にではありますが、田中優子先生の紹介をしたいと思います。近世文学、江戸時代の文学を専攻されていますが、その後、研究範囲は江戸時代の美術、生活文化、海外貿易、経済、音曲、「連」の働きなどに広がっていきます。さらに中国文学を中心に東アジアと江戸の交流、比較研究、布や生活文化を中心にインド・東南アジアと江戸の交流、比較研究などに及んでおります。江戸時代の価値観から見た現代社会の問題への言及も非常に刺激的で示唆に富むものと定評があります。

御履歴ですが、74年に本学、法政大学の文学部を卒業されまして、同大学院博士課程修了と同時に第一教養部の専任講師として就任されました。83年に教養部助教授、86年度北京大学交換研究員、91年から教養部教授、93年度にオックスフォード大学在外研究員で、2003年から法政大学社会学部の教授に移られました。最近では『樋口一葉「いやだ!」と云ふ』というのが非常に話題になっていますけれども、数多くの著作がございます。まず先ほどもちょっと話しましたが、『江戸の想像力』、これは芸術選奨文部大臣新人賞を受賞されています。そのほか『江戸百夢』では文部科学大臣賞ならびにサントリー学芸賞、学問の世界を超えた大変な賞でありますけれども、これを受賞されています。そのほか翻訳、共著など数多くあります。

先ほど自分紹介を忘れていました。進行を務めさせていただきます藤沢周と申します。経済学部で教えています、本来は作家でして、それ以前は書評紙の編集者をやっていました。ですから田中優子先生の著作は本当にいつも注目しておりまして、全く新しい歴史学というか、特に江戸学に関してはおそらく日本でトップランナーだろう、日本でトップランナーということは世界でトップであると認知しておりました。私達編集者も本当

にあこがれの対象で、いつまたどんなすてきなすばらしい本を出すんだろうとわくわくしながら待っていたのを覚えています。

今回、いろいろなところで紹介されていますけれども、『樋口一葉「いやだ!」と云ふ』という本を軸に講演をしていただきます。それでは田中先生、よろしくお願いします。

講演

田中 田中でございます。よろしくお願いします。今日は江戸時代のことではなく、樋口一葉のお話をします。私は講義では丹念に樋口一葉を読んでおりますが、今日のように1時間足らずの短い時間で樋口一葉についてまとめてお話しするのは実は初めてでして、どれだけお話しできるか、ちょっと不安に思っております。

今日はあまりいくつものお話はできないと思うんです。そこで、ふたつの作品を取り上げてお話ししたいと思います。それは、『十三夜』と『たけくらべ』です。7月に出了した集英社新書で強調したことの一つに、「音」があります。それは『たけくらべ』という小説についてなんですが、この『たけくらべ』は遊郭が一つの舞台になっています。遊郭とその周辺から見たとき、『たけくらべ』は音や視覚に満ち満ちているんです。

電気を消していただきましたが、それはあとで映像をお見せするためです。それから音も少しお聞かせしようと思ひまして、『たけくらべ』音曲リストを作りました。こんなにたくさんの音が『たけくらべ』には入っているんです。もちろん全部お聞かせできませんし、今は聞くことができない、わからないものもあります。が、もし時間があれば少しだけお聞かせしたいと思ひます。

その前に、『たけくらべ』ではなく、別の作品についてお話ししたいと思ひます。私は著書のなかで、とくに注目したことがあります。それは著書の題名にもなりました。「いやだ!」という言葉です。この「いやだ!」

という言葉や、それと非常によく似た言葉が代表作とされる5作の中に必ず入っています。私も最初は気がつかなかったんですが、全体を通して読んでいくに従って、これが重要な言葉なのではないか、と思うようになりました。

『十三夜』という作品があるんですが、この『十三夜』の中に出てくる「いやだ!」というこの言い方、この言葉が出てくるシチュエーションが大変おもしろいんです。まずその『十三夜』についてお話しして、それから『たけくらべ』がどのような観点から書かれているかについてお話しします。だいたいこの二つの話で時間が終わってしまうのではないかと思います。

レジュメには簡単な年譜を入れておきました。一葉が執筆したのはどういう時代だったのかを確認していただきたいからです。明治5年に生まれて、明治20年代にはもう亡くなっています。時代が切り替わる時にいったいどのくらいの時間が必要なのか。これは時代によって違いますが、たとえば江戸時代を例に挙げますと、江戸時代が始まってから、幕府が開かれてから、江戸時代システムというものができるまでに約35年間かかっています。ですから、どうしても30年間から35間にかかるわけで、明治もやはり約30年間かかっています。

戦争の歴史でいいますと、日清、日露の戦争まで、ということが言えると思うんです。これらの戦争を通して新しいシステムがつくられていった、という点が、江戸時代とは異なる明治時代の特徴なんです。江戸時代の特徴はその逆で、戦争を放棄することによってシステムを整えていったんですが、明治時代は戦争することによって新しい時代に入ってしまった。戦争をすることによって近代に入っていくという時代です。ですから、やはり明治20年代で亡くなったということは、時代の切り替わりのときのように位置していたかということを確認するうえで大事なことであろうと思います。

『十三夜』が書かれたのが1895年（明治28年）なんです。その前の年に

日清戦争が起こっています。ですから、明治28年という年は日清戦争の後処理の時代だということです。日清戦争は日本が300年ぶりに「戦争する国」になったということで、その意味で記念碑的な戦争です。その前に海外戦争をしていたのは秀吉です。秀吉が1590年代の終わり、92年と97年に朝鮮半島を侵略したのが最後の対外戦争でした。ですからちょうど300年たっているわけです。その、「対外戦争をする国」として世界のなかに登場した日本が、これから新しい歴史を歩んでいくという、まさにそういうところに樋口一葉の作品が立っていた、と言うことができると思います。

そのことは私に今の時代を考えさせます。つまり今度は何年ぶりにそうなるかわかりませんが、今は戦争が終わって約60年たちます。そして次第に戦争をする国になっていっています。そちらの方向に向いています。そういう時代のなかで、大きな変貌を日本は遂げているわけですが、そういうことが私のなかで重なってきます。

『十三夜』に戻りますが、その『十三夜』のなかに「いやだ！」という言葉があるんです。このへんで絵を見てみたいと思います。『十三夜』を表現するのに、どういう図版がいいか、ずっと前から私は探していたんですけれども、ほとんどなかった。ところが一つだけありました。これは手ぬぐいなんです。浅草のふじ屋という手ぬぐい屋さんの仕事を私はずっと注目していたんです。どうしてかといいますと、江戸時代にずいぶん手ぬぐいの素晴らしいデザインがされたんですが、それを復元していらっしゃる手ぬぐい屋さんなんです。

その手ぬぐいを見ていましたら、そのなかに『十三夜』の素敵な絵がありました。非常に驚きました。実に見事ないい場面を描いている。つまり『十三夜』でどこが一番すばらしいかということがわかっている人が描いた。『十三夜』のまさにこの場面なんです。人力車がありまして、そこに女性が座っています。お関という女性なんです。その前に人力車夫が立っています。普通だったら人力車夫は人力車を引いているわけです。なぜこの人力車夫はここに立っているのか。

これがちょうど今ご覧になった場面のせりふです。これはレジメにも書いておきましたが、レジメよりも画面のほうがせりふの量が多いです。「私はこれで御免を願います。代は入りませぬからお下りなすって。どうぞお下りなすって。もう引くのが厭やになったのでございます。御免なさいまし、もうどうしても厭やになったのですから」。この間にはもちろん会話が挟まれています。「何が楽しみに轆棒にぎって、何が望みに牛馬の真似をする。銭を貰へたら嬉しいか、酒が吞まれたら愉快なか、考へれば何も彼も悉皆厭やで、お客様を乗せやうが、空車の時だらうが、嫌やとなると用捨なく嫌やになりまする」というせりふをこの場面で言っているわけです。

このことをちょっと想像してみてください。夜遅く、女性が一人でタクシーに乗りました。家に帰ろうと思って乗っていたのに、途中でタクシーが突然止まって、運転手さんが降りてしまった。それで客に下りてくれと言う。「僕はもういやになったから下りてくれ」と。「そんなこと言わないで。こんなところで下ろされたって、ほかに車が通っていないし困るじゃないですか」と一生懸命言うんですが、「いや、もうとにかく私は理由もなくいやなんですから下りてください」と言われちゃったら皆さん、どうしますか。そういう状況なんです。

私は小説のなかでそういう状況を書くということが非常におもしろいし、一葉はすごく変な人だなと思いました。いったいこれは何なんだろうということがずっと心に引っかかっていた。まずこのお関さんという人は、どういうことで家に帰ろうとしているのか。家にというのは、彼女は結婚してしまして、夫のもとに帰ろうとしているんですが、どこから帰ろうとしているかといいますと、実家から帰ろうとしているのです。実はこの人は、離婚しようとして出てきたんです。実家に行って、お父さん、お母さんと話しているうちに説得されてしまして、仕方なく子供のために帰ろうと。自分の人生はもういい、子供のためだけを考えて生きていこうと決意をして、そして人力車に乗ったわけです。

普段はこういう流しの人力車にはお乗りにならない方です。どうしても、大変位の高い官僚の奥様なので、つまり運転手付きの自家用車のようなもの、そういう人力車を持っていて、それで送り迎えされるような方なんです。でも、このときばかりは家出をしてきたわけですから、町の流しの人力車に乗っているわけなので、それが突然そういう目に遭うわけです。

お関さん、よく話を聞いているうちに車夫の顔をまじまじと見たら、昔知っている男性だったのです。だから何が起ころう、というわけではありません。そうではなくて、お関はとてもいい暮らしをしている。しかし、この人力車夫はたばこ屋さんだったんですけれども、どんどん零落して行って、奥さんにも去られ、子供も亡くし、今では一人で木賃宿の一番最下級のところで暮らしています。

そこで結局これは何なのかといいますと、つまり一方は地位もお金もあります。一方は地位もお金もありません。しかし、境遇は同じなんです。「いやだ」とこのとき言っているのは男性のほうなんですけれども、お関でもある。なぜこういう場面を書き込んだのでしょうか。彼女は「いやだ」と言えなかったわけです。言えないで家に帰ろうとしているわけなんですけれども、そこでそういうふうに言ってしまうこの男性と再会することによって心が交わっていきます。

もしかしたら昔知っていた男性だなんていうことは必要なかったのかもしれない。でもあまりにも不自然だからそういうふうの設定したのかもしれない。とにかく大事なのは、このときに2人の状況が、経済的に言えば一番上と一番下であるにもかかわらず、同じものを抱え込んでいるということなんです。そういうふうに思っ、ほかの作品を読んでいきますと、やはりそういうことが大変多いのではないかと思うようになりました。

そこでレジメです。レジメの『十三夜』に見る「いやだ!」の時代、今映したこの文章が書いてある、その下なんです、一葉をめぐる3

人の男性というところがあります。この3人の男性について書いておきました。まず渋谷三郎という男性がいます、この人はもと婚約者です。町田の渋谷家といいますと、今でも議員を出しています。現在でもそういうお家なんです。つまり明治以来の立身出世志向をずっと持続している、そういうお宅が町田の渋谷家です。町田には渋谷三郎の研究をなさっている方もいらっしゃるくらいなのですが、これは樋口一葉の元婚約者で、典型的な立身出世を遂げた高級官僚です。

検事となって新潟に赴任する。それから新潟の水明楼という大きな旅館の娘さんと結婚します。ドイツのハイデルベルグ大学法学部で学びます。離婚法で博士号を取得して帰ってきた途端に、妻の不倫で離婚するんです。そうしましたら、次になんと華族出身の女性と再婚した。早稲田大学の法学部長、秋田県知事、山梨県知事を歴任しています。

この方と樋口一葉は結婚するはずだったんです。ところが父親が破産したということをきっかけにこの結婚が破談になります。明確に婚約だとか結納だとかという手続きを取っているわけではありませんので、法的な意味で婚約不履行に当たるのかどうかわかりませんが、現実には婚約不履行になっています。樋口一葉はこの渋谷三郎について日記に書いています。「今かの人はいく空にのぼる旭日の如く、実家は聞ゆる富豪の、いよいよ盛大に成らんとするけしき。実姉は某生糸商の妻に成て、此家又三百円の利潤ある頃といへり。身は新がたの検事として正八位に叙せられ、月俸五十円の栄職にあるあり。今この人に我依らんか、母君をはじめ妹も兄も、亡き親の名まで辱かしめず、家も美事に成立つべきながら、そは一時の栄、もとより富貴を願ふ身ならず、位階、何事かあらん。母君に寧処を得せしめ、妹に良配を与へて、我れはやしなふ人なければ路頭にも伏さん」。

この文章はかなり大事なところなんです、いったん婚約不履行になったのに、再び結婚の話がどうも起こっていたらしいんです。しかし物事を一葉はそっちのほうにもっていかなかったんです。そのいなかったその

途中で書いている文章なんです。やっぱり私はこの人と結婚しないと言っているわけです。自分が一番気がかりなのは母親のことです。それから妹のことです。長兄が亡くなっているのが自分が家督相続をしているんですが、実は次兄がいました。自分にとっては兄に当たる人なんですが、この人が焼き物作家でして、家を出てしまっているのです。やはりこの人もなかなか生活がうまくいかない。つまり、母や妹やそういうお兄さんのためにも本当は渋谷さんと結婚したほうがいいに違いないんだけど、しかし私が求めているのはそういうことではない、と言っているわけです。

自分が母親に対して安らかな生活をさせてあげて、妹が良縁に出会って結婚できれば、私はそのあとは「路頭にも伏さん、千家一鉢（出家托鉢の意）の食にはつかん」、そういうことを言っているんです。「今にして此人に靡きしたがはん事なさじと思ふ。そは此人の憎きならず、はた我れ我まんの意地にも非らず。世の中のあだなる富貴栄誉うれはしく捨てて、小町の末我やりて見たく、此心またいつ替るべきにや知らねど、今日の心はかくぞある」。

私はこの文章に心を打たれました。小町の末、すなわち卒都婆小町なんです。小野小町は才媛として当時から有名でした。その物語はいくつもの小町の物語になりました。その小町が老いて零落して、そういう姿まで描くようになりました。その姿を描いたのが卒都婆小町という能です。小町というのはそのように才媛なんだけれども、零落し切っていく女性の代表なんです。零落の姿まで見せた女性として日本文化のなかに位置しているわけです。ですから小町の末というのはそういう意味です。

小町の末を私はやってみたいんだと言っています。私は卒都婆小町のようになりたいんだと言っているんです。その気持ちはいつ変わるかわからないけれども、とにかく今日は私はそういう気持ちなんだということを言っています。でもこの気持ちは最後まで変わらなかったと思います。そういうふう言いながら渋谷三郎と結婚する道は取らなかったわけです。明治の典型的な立身出世とは離れた生き方をする。自分は立身出世と道を共

にしない、という決意をしたということだと思います。

さて、いつも話題になる半井桃水です。半井桃水は恋愛の相手だと言われてはいるのですが、一葉は非常に冷徹な目で見ています。半井桃水は一葉の小説の師で、朝日新聞の記者で、新聞連載小説の作者でもあります。半井家というのは対馬藩のご典医でした。江戸時代の対馬と云ったら、日本と朝鮮半島の真ん中に位置していて、対馬の武士階級は朝鮮語がペラペラです。

これはどうしてかといいますと、釜山に倭館というのがありました。日本領事館、日本商館のようなものです。この日本商館に対馬の高官たちは年中、出たり入ったりしていまして、日本と朝鮮半島との間の商業取引を取り仕切っていました。それからもちろん何百人も日本にやってきていた朝鮮通信使の接待係でもありますし、通訳も務めます。そういう対馬の藩の出の人なんです。

ですから、当人も朝鮮語がペラペラなんですけれども、とにかく時代がこういう時代です。もちろん対馬藩はもう存在しません。ご典医でもありません。対馬藩では釜山の倭館がまだ残っているにもかかわらず、もう費用が出なくなってしまいました。それで、雇用していた人たちがほとんどの首を切ってしまわざるを得なくなって、結局、対馬藩の若者たちが働かなければならない状況になったんです。

そういう事情があって、半井桃水は12歳で釜山に送られまして、釜山で働かされているんです。ですから、いい家のお坊ちゃんというのではなく、12歳から働いていたんです。そういう思いをしながら、しかしやはり日本の学校に入って英語を学ばなければということになりまして、父親が日本に返します。そして英語を学んで新聞記者になります。新聞社も転々としませんが、朝鮮語ができますから、最終的に朝日新聞の通信員として釜山にわたって7年間、行ったり来たりだと思いますが、実際に朝鮮の通信を送っています。そして帰国後、新聞小説を書くようになります。

いくつかの新聞小説を連載していましたが、一葉と知り合ったころには『胡砂吹く風』という長編小説を連載しています。今でも樋口一葉は有名ですが、『胡砂吹く風』はだれも読んだことがないという、その人が一葉の先生なんです。この小説のなかで桃水が言っていたことは、日清韓の同盟です。日本と中国と朝鮮半島が同盟を結ぶべきだということを言っているんですが、しかし、実際には明治日本というのは、同盟だと言いながら植民地支配を狙っているわけです。桃水という人は、その裏が見えなかったのではないかと私は思っているんです。

新聞記者にもいろいろありますよね。現実を見据えることができる新聞記者と、そうでなくて割と能天気の新聞記者といえると思うんですが、どちらかというところ後者かなと思ったりします。半井桃水という人はこの時代としては、かなりもてはやされていたほうだと思います。有名な方だったと思います。それは日清戦争が始まるにあたって朝鮮半島や中国に対する日本人の関心が高まっていく。高まっていくと情報が必要になる。それに乗じている人たちはたくさんいるわけで、そのなかの一人です。つまり朝鮮語ができるということで、どうもうまく生きていたのではないかと思います。

一葉が書いた桃水への見方が、日記の中にあります。一つは恋心です。「ある時は厭ひ、ある時はしたひ、よそながら物語ききて胸とどろかし、まのわたり文を見て涙にむせび、心諸みだれ尽して迷夢いよいよ聞かりし四十日にあまりぬ。……一日も思い出さぬことなく、忘るるひまも一時も非ざりし」。これはうわさを立てられたために、もう会うのはやめようと思った直後です。直後といっても四十日間会っていない。そのあいだ一日も忘れたことがない、と日記に書きつけたくらい、思っているわけです。

ところが、そのあとなんですが、新しい縁談がどうも桃水に起こってきて、そのことを友達が知らせてくれて、しかも縁談の相手の女性の写真まで一葉に見せるという場面があるんです。その縁談の相手の女性は どうして桃水と結婚したがつているのかといいますと、『胡砂吹く風』という痴

史（桃水）が作をいたく愛でて、『夫より、行たしなどの念に成たるなめり』といふ。怪しう世にはさまざまの人も有もの也けり」と書いています。つまり、「へえ、そんな人がいるの？」という感じですね。『胡砂吹く風』を読んで、ああ、この人と結婚したいわという女性がいた。それを聞いて、なんと恋心を持っているにもかかわらず、一葉は、へえ、そんな女の人がいるのと書いているわけです。

おそらく本心だったと思います。一方では恋心、これは実際にあったと思うのですが、もう一方では『胡砂吹く風』をいい小説だと思っていないわけです。つまり、文学者として自分の先生なわけですよ。しかし文学者として尊敬している気配がないんです。ということは、桃水に対して女性としての恋心がありながら、それを「単なる心の迷いだ」と認識している。人間としてとか、作家としてという目をもう一方でちゃんと持っていて、非常に冷徹に観察しているということです。

たぶん一葉は、「作家としてああいうふうにはなるまい」と思っていたと思うんです。そう思っていたからこそ、一葉独自の小説が書けたと思います。もし桃水のような作家になりたいと思ったら、全く違う小説を書いたはずですよ。桃水に対するそのような姿勢があって、結局それで桃水とも結婚しないわけです。これは母親がどうもこういう人だったら反対しそうだというのがあったかもしれませんが、そのくらいはもし本気で結婚しようと思ったら乗り越えていくはずなので、たぶん気持ちのなかには二面性があった。

もう一人、久佐賀義孝という男性がいます。久佐賀義孝のところにどうして行ったのか、その理由がおもしろいんです。一葉は相場師になりたかったんです。相場師になりたい、つまり何でもよかったと思うんですが、お金が欲しいということです。相場師というのは一気にもうけられるかもしれないわけです。一葉はどこか心の中で小説、文学で食べていってはいられないのではないかと考えているんです。ですから吉原の裏で駄菓子屋さんを開いたときにも、それで生計を立てて小説で食べようとは思わないよ

うにしたかったんです。現実にはそうならなかったんです。ですから、相場師になろうというのもそういう気持ちがあったわけです。

またあるときは久佐賀義孝からお金を借りようとしています。私もそれからほかの論者もそういうことを書いていますが、一葉はいろいろな人に借金しています。桃水にも借金を申し込んでいましたし、実際に桃水はお金を渡しているふしがあります。それは記録にははっきり残っていません。それから久佐賀義孝には確かに借金を申し込んでいます。もちろんほかの人にも借金の申し込みをしています。

なかなか貸してくれないわけですが、貸してくれないと一葉は非常に怒ります。つまり、あるところにはあるわけです。あるところにあるのに、どうして貸してくれないのだと。私たちから考えると、ちょっと変な怒りだかなと思うんですが、その男性たちは自分よりも楽に稼げるはずなのに、しかも自分の文学への思いをわかってくれていると言いながら、どうして貸してくれないんだ。約束しながらどうして貸してくれないんだということは何度も日記に書き付けています。

久佐賀義孝に何度か借金を申し込んで、それに対して返事が来たんです。その返事が「謂れなく貴姉に向て救助するときは貴女も之れを心善しとせざる事ならん……貴女の身上を小生が引受くるからには貴女の身体は小生に御任せ下さる積りなるや否や」。わかりますよね。お金を貸してくれと言うんだったらば、身体も任せるんでしょうねと言っているんですね。そうじゃなかったら、あなたも気持ち悪いでしょうと。ただお金をもらっては気持ち悪いでしょうと言っているんです。

それを読んだ一葉はものすごく怒ります。そして「そもや、かのしれ物(ばか者)、わが本性をいかに見けるかあらん……あはれ笑ふにたえたるしれものかな。さもあらばあれ、かれも一派の投機師なり」。あいつは結局、詐欺師だと言っているわけです。これは結婚の申し出ではなくて、めかけにならないかと言っているわけです。

これは今の時代ではちょっと奇怪な申し出かもしれませんが、明治時代

では別にどうということない、よくあることで、そして実際に女性の作家のなかにはそういう方はいらっしゃいます。おめかけさんとして生きながら女性が小説を書いたり、歌人であったり、画家であったり、女優さんであったり、いくらでもある話なんです。ですから、別に特別なことを言われたわけじゃない。久佐賀さんのほうも別に特別なことを言った気持ちもないわけです。そういうものでしょう、と手紙で書いてきただけです。お金が欲しいんだったらこうしたらどうですかというくらいのつもりですよ。

しかし、それに対して非常に誇りが傷つけられているわけです。ではこれきりになるのかといいますと、このあとさらに一葉は久佐賀さんに借金を申し込んでいます。本当に借りています。借りた結果、どうなったかは書いていません。ですから、いろいろな説が飛び交うんですが、これはわかりません。このように周りの男性たちを見渡してみますと、立身出世とか、それから知識人なんだけれども、時代をうまくわたっている知識人とか、それからお金もうけが上手なんだけれども、ヤマ師だとか、そういう男性ばかりなんです。

実際の生活のなかでそういう男性に囲まれている一葉が作品のなかでいったいどういう男性を書いたかです。それが次のところに書いてあります。ご存じの『たけくらべ』の藤本真如、これは父親に対する反発心が非常に強いです。お坊さんなのに酒と生臭物で太りきって金もうけのためには何でもする、そういうお父さん。かんざしを売ってまでお金もうけをしようというお母さん、それから葉茶屋をしているお姉さん、皆さんお金に大変関心のある家族に囲まれ、その家族を不潔だと思い、とうとう家を離れて僧侶として勉強をきちんとしようと思うわけです。これが藤本真如です。

それから同じ『たけくらべ』に田中正太郎というのが出てきます。質屋の息子です。母親を亡くして、お父さんが田舎へ逃げてしまって、大変大

きな家に金貸しのおばあさんと一緒に暮らしています。裕福なんです、非常に寂しい悲しい生活をしている。

それから『にぎりえ』に出てくる布団屋の源七。妻子がありながらお力に入れ込んで布団屋をつぶしてしまいます。妻と子供と3人で貧民窟で暮らしているんですが、最後は家族崩壊となりお力と無理心中する。

それから高坂録之助、これが先ほどの『十三夜』です。お関が嫁に行ったのち、放蕩して身を持ち崩し、結婚はしたものの子供は病死し、妻は実家へ帰り、ひとりで木賃宿に暮らしながら人力車を引いている。

山村石之助、『大つごもり』に出てきます。土地持ちの富豪の息子ですが、家を出たきり金の無心にしか帰らない。貧しい者たちを助け、一緒にふるまい酒を飲むのが好き。

傘屋の吉というのは『わかれ道』に出てきますが、両親を知らない孤児で、角兵衛獅子の一団にいたところを傘屋に拾われ、職人として働いている。身体が小さく、人にからかわれることが多い。

こういう男の人たちが実生活ではなくて、作品には出てくるんです。それを考えますと、非常に対照的だなと思います。つまり現実の世の中で地位とかお金とかさまざまなことでうまく切り抜けていく男性と、それとどうしてもそれができないで落ちていく男性です。その二つに分かれているわけです。まさに『十三夜』に出てくる録之助という男性はその代表のような男性です。そういうふうに落ちていっているのにもかかわらず、一生懸命働こうか、もう一度気を取り直してちゃんと生活を立て直そうなんて全然思わないわけです。それどころか、いやになったから人力車を引くのをやめてしまおうなんて思ってしまう、そういう男性です。

どうしてそういう男性たちを描いたのかということを考えますと、これは私は一葉のなかにそういう気持ちがあれば書けないと思います。想像ができないわけです。藤沢さんにもあとで聞いてみたいと思うんですが、小説を書く方たちは自分のなかにないものを書けるかどうかというのは私もよくわかりませんが、一葉の場合には男性の登場人物が無視でき

ないと思います。つまり女性の登場人物に自己投影しているところもありますけれども、非常に強く男性の登場人物に自己投影している。

一人の人間はいろいろな面を持っています。そのいろいろな面、一葉の中にあるいろいろな面が男性の登場人物にかたちを変えて出現してくるのです。一葉のなかには先ほど渋谷さんのところで読んだような、「自分は小町の末をやってみたいのだ」と思うような「落ちていく自分」がある。気を取り直して頑張ろうか、などとは思わない。落ちるところまで落ちようとしている自分がいる。

そのことを時代と照らし合わせて考えてみますと、立身出世の時代です。1892年に伊藤博文内閣が発足しました。かつてお札の顔でした。それから福沢諭吉、やはりお札の顔になりました。そして両者とも「脱亜入欧」を主張しました。脱亜入欧というのは、人であれば立身出世主義です。つまり欧米を一番高い位置にあるものと見なし、現実にはどうかどうかは別問題ですが、とにかく見なして、そこを目指してキャッチアップしようとする。そのキャッチアップしようとしないう自分より下の者は切り落とすか、もしくは利用する。これが脱亜入欧であって、または立身出世主義なわけですが、そういう時代が明治時代に始まりました。

1894年に日清戦争に突入します。一葉と同じく新札の顔になった福沢諭吉は、この戦争を「文明と野蛮の戦争」と呼びました。どちらが文明かわかりますよね。日本が文明、中国が野蛮なんです。そして軍費集めに駆け回っていました。その人が1万円札です。一葉は5000円札です。この年に日清戦争が終結すると、「戦後経営」という言葉が現れてきて、さらなる軍備拡張に向かっていきます。その結果が日露戦争になるわけです。その後さらなる軍備拡張をするために殖産興業の拡大、植民地経営、官界・財界への人材養成のための教育編成が起こるわけで、この教育編成のときにヨーロッパに留学するエリート知識人たちが出現するわけです。まさにそうになっていくことが立身出世でした。

世の中は貧富の差が広がり、欧米を取り入れるために育てられた大学教育によるエリートと、教育のない大衆と二分されていく。第二次大戦後の日本は、そういう貧富が差がほかの国に比べて少なくなっていくように思いますが、また同じような時代に入ってきているような気がします。

「作られた知識人」という言葉がここに書いてあります。鶴見俊輔さんの言葉です。藤沢周さんが司会をしている「週刊ブックレビュー」という番組があるんですが、私は藤沢さんのゲストとして出たことがありまして、そのときにちょうど鶴見俊輔さんの『戦争が遺したもの』を取り上げたんです。

この本のなかに「作られた知識人」という言葉が出てきました。これは忘れられない言葉です。鶴見俊輔さんのお父さんは大変有名な、政治家・評論家・小説家の鶴見祐輔です。それこそ知識人なんですが、「作られた知識人」とは自分の父親のことを言っているんです。どういう人かというと、欧米の知性を身につけた指導者、権力者、一番病にかかった人間だと。つまり自分が一番になるぞ、と考える、一番にならないと自分が許せないという人間です。歴史の評価に基準があると思っている人、前の時代を否定して乗り越えてしまう人、上から降ってきた教科書をこなす人、こういう人はたいいてい転向者になるんだと言っていますが、全部父親のことなんです。

こういう知識人に対して「作る知識人」つまり、学齢はないが自分の思想を自ら作ってきた人々がいる、という。これだけで鶴見俊輔の仕事の意味が全部わかります。鶴見俊輔はなぜああいう仕事をしているのかということが、すべてわかってしまいます。つまり作られた知識人の仕事は僕はしない。作る知識人だけを評価する。鶴見俊輔は一貫してそういう仕事をしています。

こういう方も現代に生きていらっしゃるわけですが、しかしその記憶のなかにはまさに明治の作られた知識人、欧米にキャッチアップすることしかエリートとしての生きる道がない人たちがいたわけで、そういう知識人

たちを輩出するということは、日本という国がそういう国であった、ということでもあるわけです。

そういう時代のなかでもう一度もとへ戻って一葉の書き方を見てみますと、それとは反対の方向を向いているということにお気づきだと思います。そういう時代のなかにあって、反対の方向を向いた小説を書けるということが、非常に男性的な気質を持ちながら、それを書いてきたということが、一葉という人のすごさと、その思想を感じます。24歳で亡くなっていますから、私たちの感覚ではそのくらいの年齢で、どうやって自分の思想を作り上げていくんだろうと思ってしまいますが、しかしやはり私は、小説のなかで樋口一葉はそういう思想を鍛え上げていったに違いないと思うんです。

ものすごい集中力で書いていたはずで、特に1年半、約14カ月の間に代表作の5作を書いて、そして亡くなるわけです。ですから大変な集中力で、自分の価値観のすべてをそこにかけていったと思います。価値観のすべてをかけていったその目の中に見えてきたものは、立身出世主義に奔走する現実の自分の身の回りの人たちとは全然違う人間たちだった、ということなんです。

さまざまな人間が見えてきました。そこで『たけくらべ』の中に入ってみたいと思います。『たけくらべ』は象徴性に満ちています。たくさん作品のなかで何が一番いいってなかなか言えないんですが、やはり見事だなと思わず感心してしまうのは『たけくらべ』なんです。構成がとてもきれい。対称性がきちっとしています。

どういう対称性かといいますと、たとえば江戸時代の中頃の鈴木春信という浮世絵師の浮世絵に描かれてるようなシーンが、その一例です。少年が少女のために梅の木を折ってあげようとしています。枝を折る、花が咲いている枝を折るというのは、中国古来から男女関係のことを意味します。それだけではなく、日本の和歌の世界では、その男女関係をにおわせ

ながらあからさまにしないということを意味します。たとえば梅の枝を折るんですが、その梅の香りだけを感じるとか、この下に川が流れています。その梅の枝が咲いていないときや見えないときでも、川から香ってくる香りで、ここに梅が咲いていたんだというのがわかる、というような歌を日本人は作ってきたわけです。これは恋心があっても、それを明確には表さないという意味でもあるんです。

『たけくらべ』には一度も「恋」という言葉が出てきません。出てくるとしても、端唄の一節として出てくるだけで、恋心を持っていたとか、好きだとか、そのたぐいの言葉は一切出てきません。現実だけを書くんです。胸がどのようにドキドキしているのか、どういうふうに冷や汗が出てきたのか、どうやってわなわなするような恐ろしさに震えたのかということが書いてあるんです。それが恋心だというレッテル張りをしていないんです。一切のレッテル張りをしないで書き上げているんです。読むほうが、ああ、これは恋心なんだと気がつくしかない。気がつかない人は永遠に気がつかない。書いてないわけですから。恋を体験して、わなわたと震えるような恐ろしさだとか、ドキドキするような気持ちを体験した人でないと、あれはたぶんわかりません。

私たちは多かれ少なかれ、程度の差はあってもちょっとくらいは似た体験をしているので、これは恋心なのだわかるわけなので、書いてあるわけではありません。そういう非常に象徴性に満ちていて、心理状態を推測させるというだけではなく、あらゆるところにいろいろな和歌の象徴性がちりばめられていて、和歌や中国の古典や物語やいろいろなことをわかっていればいるほどおもしろくなる作品です。

それから遊郭の描き方、これは江戸時代をやっていて遊郭をよく知っている人間から見ると、実に見事な遊郭の描き方をしています。ところが、遊郭の中に入っていないんです。遊郭の中に入って中から書いているものは一つもありません。美登利が遊郭の中に入る場面が1カ所だけあるんですが、ただそれは外にいる正太たちが見ている視線で書いています。美登

利が中に入っていったよと三五郎が言って出てきた。そうするときれいな格好をしている美登利がいて、そこで話しかけるという場面としてあるんです。ですから、筆が一切遊郭の中に入っていません。にもかかわらず遊郭が書けているんです。

たとえば「春は桜の賑ひよりかけて」、これは『たけくらべ』の中の一節です。これは何のことを言っているかといいますと、こういうような場面のことを言っているわけです。江戸時代の遊郭ですが、ほとんど明治時代も同じです。真ん中に桜が咲いています。吉原遊郭は桜の名所でした。桜の季節になると非常にたくさんの観光客が押しかけるんです。女性も子供も押しかけます。なぜ桜の名所なのかといいますと、真ん中に咲いている桜、実は桜が咲く季節になると、全部植木屋から運んできて植えるんです。散り終わると全部抜いて帰るんです。毎年それをやっています。

これはいかに吉原遊郭という空間が演出されきった空間であるかということ。この碁盤の目でわかると思いますが、遊廓は都市と同じです。ですから江戸の中のもう一つの都市なんです。真ん中が植え込みのようになっていて、桜を抜いてしまったあとで、またボタンの季節になるとボタンを植えたりするんですが、ほとんどこれは歌舞伎芝居のような空間です。

そしてこれが明治3年の吉原遊郭です。一葉が見ていた吉原はこういう遊郭だったんです。門がれんが作りになりまして、なんと後ろのほうには非常に高い洋館があります。これが明治時代の吉原遊郭です。同じように桜を植えています。そして明治時代のこの花開き、つまり今言いました花見の季節に観光客が押し寄せている風景です。そこでおいらん道中がおこなわれています。

「なき玉菊が燈籠の頃」、これも『たけくらべ』のなかの一節です。盆の季節になりますと、真ん中に通っている仲之町通りの各茶屋が燈籠を下げるんです。そこに文人とか画家がいろいろな絵を描いたり、それから今ここで見ていますように、いろいろな飾り物をしたりしますので、燈籠がと

てもきれいです。これも観光客が押し寄せるんです。これは盆のときの行事です。

「ついでに秋の新仁和賀には十分間に車の飛ぶ事此通りのみにて」, この通りというのは一葉が駄菓子屋を出していた吉原遊郭の後ろ側にある通りのことですが, 今茶屋町通りと言っていますけれども, その通りのことです。「此通りのみにて七十五輦と數へしも」, 10分間75輦の人力車が通ったのを一葉は数えていました。それは日記に書かれています。旧暦の8月1日から1カ月間にわたって毎日お祭りが行われていたんです。新仁和賀というので, もう新暦になってからの仁和賀の祭りです。新暦になりますと1カ月半のずれがありますので, 9月に行われるようになりました。

このときも非常にたくさんの人が出入りします。このときには芸者さんが乗った屋台が引き出されまして, その上で遊女や芸者が踊りを踊るんです。下で芸者さんが三味線を弾いて唄っている。毎日なんです。雨が降るとやらないんですが, 降らない限り毎日やっています。それが仁和賀です。女芸者が踊りや三味線を, 男芸者つまり幫間・太鼓持ちたちが, お笑いの演芸をやったりするわけです。また男装した芸者たちが, 獅子木遣りに繰り出したりしました。

「二の替りさへいつしか過ぎて」, これは『たけくらべ』の中の一節です。二の替りは歌麿も描いています。二の替りというのは旧暦8月(新暦9月)15日に2番目の出し物になるわけで, その後半のことを言います。つまりお客さんを飽きさせないために, 真ん中でいろいろ趣向が変わるわけです。それを二の替りといいます。これは船の山車が出ているところです。というふうにして, 遊郭の季節の変遷, 変化を一葉は『たけくらべ』の中で非常にうまく書き込んでいます。

そして, 私が本の中で扉に使った広重の絵の季節に入ってゆきます。この広重の絵を思い出したのは、『たけくらべ』のあるくだりだったんです。「二の替りさへいつしか過ぎて, 赤蜻蛉田圃に乱るれば横堀に鶉なく頃も近づきぬ, 朝夕の秋風身にしみ渡りて上清が店の蚊遣香懷爐灰に座をゆづ

り、石橋の田村やが粉挽く臼の音さびしく、角海老が時計の響きもそゞろ哀れの音を傳へるやうに成れば 四季絶間なき日暮里の火の光りも彼れが人を焼く煙りかとうら悲しく、茶屋が裏ゆく土手下の細道に落かゝるやうな三味の音を仰いで聞けば 仲之町藝者が冴えたる腕に、君が情の假寐の床にと何ならぬ一ふし哀れも深く、此時節より通ひ初るは浮かれ浮かるゝ遊客ならで、身にしみじみと實のあるお方のよし。遊女あがりの去る女が申き」。

これは『たけくらべ』の一節です。吉原の季節の変化を書いています。蚊遣香つまり蚊取り線香がなくなって、懷炉が変わっていくとか、細道に落ちかかるようなという、普通は月が出てくるんですが、落ちかかるような月というのをイメージさせておいて、落ちかかるような三味の音、そこに仲之町芸者の唄が聞こえてくる。いろいろ種類がある芸者のなかで吉原芸者が一番腕がよかったんです。その一番腕のいい仲之町芸者の三味の音が聞こえてくるしみじみとした季節になると、これが『たけくらべ』の最後の季節、酉の市の季節です。広重の『名所江戸百景』の酉の市の絵を見てみましょう。遠くに、酉の市に行く人、帰る人の列がぎっしりと見えます。酉の市というのは熊手を買うんです。ですから大きな熊手を買ってかついで帰っていく人の姿が見える。それをまた窓辺のネコが見ているんです。

酉の市の日の夕暮れです。富士山が見えて地平線が赤い。ということは日暮れですよ。ずっと目を下に落としていきますと、座敷に熊手のかたちのかんざしがあります。かんざしが何本かささっているのが、なぜか1本だけ外れていて、そしてちり紙が見えます。そして屏風の裏が描かれている。屏風の内側をわざわざ隠してあるんです。あとは想像してくださいという意味なので、皆さん、想像してください。

この季節に来るお客さんは浮かれた気持ちの人ではなく、しみじみと情のあるお客さんなのだ、と一葉の書くそのお客さんが、この屏風の内側にいるわけです。私は『たけくらべ』のこのくだりを読んで初めて、広重の

この絵のぬくもりがわかったんです。江戸時代から続いている季節の情緒というものを、実にうまく書いてあります」。

「身にしみじみと實のあるお方のよし。遊女あがりの去る女が申し」というのは一葉が書いているのですが、だれかにインタビューしているのではないかと思います。一葉は『にぎりえ』を書いた前後に、手紙の代筆をしていたということがわかっています。この吉原遊郭でそうだったかどうかはわかりません。しかし、非常に遊女たちの生き方に関心を持っています。

しかし、それだけではありませんでした。今のはしみじみとした感情のことを書いてありますが、『たけくらべ』の基調になっているのは「しみじみ」ではなく、非常にうきうきとしたものです。とても賑やかなものです。たとえば酉の市の季節は、11月の末ですからとても寒い、本当に暗い季節になってくるわけですが、にもかかわらず「此年三の酉まで有りて」「大鳥神社の賑ひすさまじく」と言って、酉の市の情景を『たけくらべ』では「河岸の小店の百疋づりより、優にうづ高き大籬の樓上まで、絃歌の聲のさまざまに沸き来るやうな面白さは大方の人おもひ出で、忘れぬ物に思ふも有るべし」と一葉は書いています。

「河岸の小店」、遊郭の端っこのほうにある小さなお店、遊女屋のことです。「優にうづ高き大籬」というのは洋館になっていますから、さらに高くなっていますが、タワーみたいになってしまっている大きなお店のことです。一番下のところから一番高いところまで三味線の音が聞こえて、いろいろな歌が聞こえてわきかえるようになっている。この年の酉の市ってこんなふうだったんだ、そのおもしろさはだれもが忘れられないくらいだった、と書いています。

おそらくこれは一葉の本音だと思います。もうこれを書いているときには一葉は浅草にいないんです。文京区の西片というところに越しているんです。ですが、それでも一葉にとって、ここで暮らしたときの酉の市の賑わいは忘れられないものだったのではないかと、それほど吉原とその界限はたい

へんに賑わっていて、いつもうきうきとした空気が漂っていた、これが『たけくらべ』の基調になっていますから、『たけくらべ』という作品は決してみじめな作品でも悲しい作品でもないです。実際にそういう音を知っていれば知っているほど耳に聞こえてしまうところがあります。

これらの、国芳が描いたさまざまな芸人が『たけくらべ』には実際に出てきます。「住吉踊り」「大神楽」「角兵衛獅子」「よかよか飴」、全部出てきます。こういうくだりがあります。「来るは来るは、萬年町山伏町、新谷町あたりを堺にして、一能一術これも藝人の名はのがれぬ、よかよか飴や輕業師、人形つかひ大神楽、住吉をどりに角兵衛獅子、おもひおもひの扮粧して」と。

今までいろいろな『たけくらべ』論を読みましたが、ほとんど皆さん読み飛ばしています。注目していない、つまらないところだとたぶん思ったのだと思うんですが、私にとっては一番おもしろいところなんです。つまりこういう、江戸時代の人たちも記録しておきたいと思った芸人の姿がそのまま書いてあるんです。

まず大神楽、この歌麿が描いた、吉原遊郭の中に入っている大神楽はお正月の風景です。せっかくですから、ちょっとこのへんでテープを回してみようかと思います。まず木遣りです。

(テープ)

これが木遣りです。音曲リストの最初のほうに載っています。美登利の同級生たちが小学校に通っているんですが、小学唱歌なんて歌わないで木遣り音頭でもやりそうな雰囲気だ、というところが出てくるんです。木遣りには二つあります。これは本物の木遣りです。次は木遣りくずしというのがあります。子供たちはどっちを唄ったのでしょうか。

(テープ)

こういう歌を中学生くらいの男の子たちが歌ってしまう。次は正太郎が唄う唄です。13歳の正太郎が、こういう唄を唄っていました。

(テープ)

これは私の友人の地唄の方が歌っているものですが、かなり上品に歌っていますから、もうちょっと色っぽく歌うんじゃないかと思うんです。次は大神楽です。

(テープ)

小さなまりを籠に入れたり出したりしながら笛や太鼓が周りにいまして、その曲芸を見せるんです。次は新内『明烏』です。

(テープ)

これを歌っているのは、『たけくらべ』では女太夫です。この女太夫が目の前を通って行って、吉原の中に入って行ってしまふ。自分たちの町にはとどまらないんです。お金をもらえないから。吉原に行ったほうがはるかにお金になるので、目の前をすっと通り過ぎていってしまうんです。いろいろな芸人さんが目の前を通り過ぎていく。音曲リストのなかの「よかやか飴」「大神楽」「住吉踊り」「角兵衛獅子」、それから女太夫、こういう人たちが目の前を通り過ぎて行って、吉原にどんどん入っていくのを美登利が見ながら、なんて惜しいことだろうと思い、最後に女太夫をつかまえて、そでのところにお金を入れて、「明烏を歌って」と言います。で、この歌が聞こえるんです。明烏のどこのくだりというのが書いてないので、私が推測してお聞かせしました。

これは広重が『名所江戸百景』で描いた「住吉踊り」の一団の後ろから女太夫が歩いている光景です。『たけくらべ』は、町の中を歩いているこういう芸人さんたちを、次々と書き付けている。さらに一葉は、その芸人さんたちがどういう出自なのかを書いています。「萬年町山伏町、新谷町あたりを塙にして」——これらは当時の下層階級の暮らす貧民窟です。

一葉の晩年、亡くなる年に横山源之助という人が、一葉を訪ねています。横山源之助は、日本で初めて『日本之下層社会』という本を書いた人です。『日本之下層社会』の中で、その当時どういう貧民窟があって、その人たちがどんな暮らしをしていたか、きちっとルポルタージュした人です。一葉を訪ねていたということで、交流があったことがわかります

が、一葉は下層の人たちをきちっと見て、『たけくらべ』の中に書き付けたのです。

「お顧客は廊内に居つゞけ客のなぐさみ、女郎の憂さ晴らし」、これは『たけくらべ』の一節です。一方これは歌麿が描いた居続け客の絵です。居続けというのは帰らないで、何日も何日も遊郭に泊まっている人です。お掃除の時間になるとみんなお客さんが邪魔なんです。しょうがないから、窓辺のところで一人で外をながめています、こういうお客さんがお金をたくさんくださるので、芸人さんたちは町の中をずっと通り過ぎていってしまつて、吉原にどんどん入っていってしまう。新内のくんだり、それを美登利が見て、止めるという場面だったのです。

こういうふうに『たけくらべ』はほかの作品と違って、今お聞かせしたような古い歌や、小学唱歌とか「厄介節」というような当時の新しい歌まで、書き付けている。これだけの音が一葉の耳に聞こえていて、しかも当時の読む人は読みながら、おそらく唄が耳に聞こえてきたのだと思います。

私たちが『たけくらべ』という作品を何かみじめな暗いものにどうしてもとらえてしまうのは、まず遊郭についての知識がない、遊郭の雰囲気を知らないということと、もう一つはこの音が聞こえないということだと思ふんです。この音や歌を脳裏に聞きながら読んでいったら、『たけくらべ』というのはなんて賑やかな嬉々とした世界なんだろう、ということや、それがまさに美登利という女の子の心の中そのものなんだということがわかってくるはずです。

にもかかわらず美登利は、真如が自分を裏切ったという思いから沈んでいきます。つまり美登利の中に二つの人間がいる。本当にもう、人間が変わってしまったかのように美登利が変化していく。美登利は大人になるというのが何なのか、わかってきた。「大人になるのはいやなこと」と、ここで美登利は「いやだ」と言っています。大人になるのがいやだと言って

います。

大人になるというのはどういうことなのかを知ってしまったわけで、そのことは遊女になるのがいやだという程度の問題ではない。これは私たちにつながっているのです。つまりどんな時代でも、人間は大人になる、社会的な自分になるってどんなことなんだろうと思いながら生きているわけです。大人になるのはいやだ。大人になった人たちもそう思いながら生きているわけです。

そういう「社会的な自分」を見据えながら生きていく苦しさというものを、たしかに一葉は見つめていると思うんです。そして、一葉は矛盾の中に生き、さまざまな事柄のはざまの中に生きる確かな自分を、持っていたと思います。一葉の作品は必ず、複数のものを対称的に描いてゆきます。そこには何通りもの対称性があり（たとえば大人と子供、男と女、貧と富）、一葉はその両方の境界で、世界をみつめていたのだと思います。

今日は二つのことしかお話できませんでした。宣伝するわけではありませんが（宣伝するんですけれども）、『樋口一葉「いやだ!」と云ふ』をこの会場の外で売っていますので、もっと知りたい方は読んでくださればと思います。ありがとうございました。

司会者 本当に樋口一葉というのは女流作家の描いた作品の世界の奥行きと広がりを感じさせてくれました。ありがとうございます。

質 疑

司会者 ちょっと時間が押しているんですが、せっかくの機会ですから田中先生にご質問などありましたら、どんなことでもいいので何かありませんでしょうか。どうぞ。

質問者 町田市から参加しました徳永と申します。田中先生、今日は一般市民にも公開していただきましてありがとうございました。ここ1年間ほど一葉はあちらこちらでいろいろ取り上げられて、ついに5000円札にな

っておめでたいと思っておりますが、田中先生の一葉研究とか一葉論では歴史的な背景まで取り上げられまして、非常に奥深いものを感じまして私も、先生のご著書を少しずつ読んでいきたいと思っております。

一つお尋ねしたいことがあるんですが、一葉の人間像といいますか、精神性といいますか、それに対する批評といいますか、対立的な立場にある平塚らいてふが言ったそうですけれども、一葉は古き女なりという言葉があるそうで、私はどちらかというに一葉の側に立つ人間だと思っておりますが、そういう具合にして、現代から見る一葉論と平塚らいてふの見た一葉の立場の違いといいますか、先生はどちらに立たれて、どのようにこの立場を擁護されるかお尋ねしたいと思います。

田中 大変な質問が来てしまいました。(笑) ありがとうございます。これであと1時間くらい話してしまいそうですが。どちらの立場に立つかという、敵、味方というようなことではないと思いますが、大変難しいです。どちらの気持ちがよくわかるかといいますと、一葉の気持ちのほうがよくわかります。そして平塚らいてふが言っていることももちろんわかります。

ただこれは後の女性解放運動にもつながっていくと思うんですが、女性解放運動の持っている一つの特徴は、どこか立身出世主義的なんです。そこには男性が率いている社会を自分たちもやっぱり率いていくのだという心構えがある。その覚悟はすばらしいと思うんですが、しかし、では男性が率いていく社会、その男性というのはいったいどんな男性なのか。

つまり女は弱いだけではない。女は我慢しているだけではない。女も男性と一緒に社会を率いていくのだというその目で見ているその男性像について考えてみますと、その男性像はやはり社会を引っ張っていく男性像です。そうでない男性は見えていないわけです。つまり先ほどお話ししたような、一葉の小説の中に出てくる零落する男性とか、そもそもそういう価値観を持っていない男性とか、そういう男性たちもたくさんいるわけで、そして男性もまた変わることができるわけなんです、女性解放運動という

のは男性に変化を促すより、女性がもっと表に出ようということから始まりました。そこには足りないものがある。それは人間の生き方として、どういう生き方をすべきなのかということや、人間の生き方は何なのか、というそういう視点です。

平塚らいてふは私も大変好きな人なのですが、そういう意味で、女性解放運動は人間の片方しか見ていないかもしれない、と時々思います。心情としては樋口一葉のほうがわかります。ただ、らいてふのような人たちがいなければ、今私はここに立っていないと思います。ですから、そのことを考えると、一葉のような人だけでは私たちは今でも職も得られなかったかもしれないんです。それは本当に心にこたえるほど、らいてふの存在は重要だったと、しみじみと思うことがあります。よろしいですか。本当に難しいいい質問をありがとうございます。

質問者 法政大学経済学部の中村です。私は経済学が専門なので、文学は疎いんですが、一葉はたまたま好きで全作品を読んでいます。一葉論の本も全部とは言いませんけれども、大半は目を通してはいますが、一葉についての議論というのはものすごくたくさんあるんですね。私は自分の一葉像というのをきちんと持ちたいなとかねてから思っていたんですが、最近はどうあきらめようかなと思ったりしています。一葉は24の小説を書いていますけれども、1作1作がみんなすごく問題があって、問題といいますか、全部主題が違うんです。それを書いた作者を考えますと、どういう作者だったのかなと想像するのですが、24の小説は全部違った一葉像を作り出すことができる。

たとえば『琴の音』という短編がありますけれども、『琴の音』というのは明らかに音楽の力で人間を改悛させるといいますか、ぐれた男の子が琴の音を聴いて改悛してまともに生きていこうという決意する。これは明らかに北村透谷の芸術論の影響ですね。人間を感動させるといいますか、それで人間を改悛させるような力を持っているのが文学だと、一葉は書いているわけです。そうすると『琴の音』を書いた一葉というのは、『文学

界』の若い作家たちと共通した作家と見なせるんです。ところが、『にごりえ』とか『大つごもり』とかを読んでもみると、全然違った一葉が出てきてしまっただけで収拾がつかなくなってしまうんです。

今日は『たけくらべ』が大きなテーマになりましたので、私はちょっとその点でお聞きしたいことが一つあります。ほかの作品と違って、『たけくらべ』は日本文学の伝統に沿って、春夏秋冬の四季を背景にして春から始まって冬で終わっている。冬で終わっているというので、少なくとも『たけくらべ』という作品で一葉を見た場合、『たけくらべ』に出てくる一葉の人生観というのは人間の人生というのは冬で終わるんだと読めます。

松尾芭蕉の『奥の細道』の最後が「旅に病んで夢は枯れ野をかけ廻る」というんですが、枯れ野というのはたぶん死んだ世界ですね。まだ死んでも俳句を作り続けていきたいという、夢は死んでも残ってしまうといえますか、そういう壮絶な死で終わっているわけです。『たけくらべ』の最後も冬です。たしかに先生が言われたように三の酉の賑わいというのは、私も毎年お酉様に行くんですけども、すさまじいですよね。

昔と比べたらだいぶ小規模になりましたけれども、三社祭なんかよりもはるかにすさまじさを感じるわけです。それが終わったあと初霜が降りて、藤本信如がどこか出家していなくなってしまうというので、つくり花のスイセンが置いてあったわけです。木枯らしが吹いてくるんですけども、それで終わるということは、結局一葉は人間の人生に対して、『たけくらべ』では生きるということは非常につらい悲しいことである。別れがあったり、そのために春があり、夏があり、少年時代があり、いろいろなことがあったんですけども、結局冬で終わっていくんだというふうに言っている。

『たけくらべ』ではそういう人生観を明白に打ち出したのではないかと私は思っているんですけども、先生はどうですか。『たけくらべ』の騒々しさとか賑やかさというのはたしかにミュージカルみたいな世界が描かれているわけですけども、最後冬で終わっているという点でやっぱり

無常観の文学じゃないのかなと思うんですが、その点をちょっと。

田中 ありがとうございます。おっしゃるとおりだと思います。私は『たけくらべ』を論ずるときに非常に強調したのは脈やかさなんです、それはそこをいつも通り過ぎてしまうからなんです。それが基調ということをお話ししましたが、たしかにほかのものでも、たとえば『にがりえ』は無理心中かどうかわかりません。死因さえも実はわからないんですが、殺されたのかもしれない。心中かもしれないとみんながうわさしているというところで終わります。そういう死で終わっている。また『わかれ道』というのはまさにわかれて終わります。

というふうに考えていきますと、たしかに最後が非常に悲しいですね。おっしゃるとおりだと思うんです。それが人生観なのかどうかというのは私にはまだわからないんですが、なんていうんでしょう、生きるということへの考え方が、一葉が和歌を作ってきた、その春夏秋冬のリズムというんでしょうか、それと実にはっきりと重なっていて、それは人生観なのか、それとも一葉が学んできた和歌のなかにそもそもある移ろいの感覚なのか、ということがまだわからないんです。ですから、本人の感覚なのか、そうではなくて日本の文学そのものが持っている本質なのかという問題です。

私は結論が出ませんが、日本の文学がそういうものを持っているということは、そこだけははっきり言えると思います。そういう意味で先ほどの質問者の方がおっしゃったように、平塚らいてふから見ると一葉はきつと古い女なんです。そういう日本の伝統的な人生観というものを手放さないでいた、ということではないか。

ただ違いがあるんです。それは何かといいますと、非常に観念的なもの、文学の持っている観念的な図式的なものを持ちながらも、大変細かい観察をしている。つまり現実と向き合っているという違いがあります。現実と向き合っているからこそ近代文学ができあがってくる。一葉の作品は近代文学なんです。古典ではないんです。古典をやっている人間から見る

と、あれは古典ではないんです。明らかに近代文学なんです。ですから、そういう意味では萩原先生がおっしゃったように、自分の人生観にしたのかもしれないという気がちょっとなりました。また考えてみようと思います。ありがとうございました。

司会者 ありがとうございます。ちなみに萩原先生は経済学が専門ですが、『たけくらべ』と『にぎりえ』を全部暗誦されている。

田中 暗誦されるんですか。すごい。

司会者 全部覚えていらっしゃる。すごい一葉マニアらしいです。そのほかにまだありませんか。せっかくのチャンスですので。はい。

質問者 市ヶ谷キャンパス学部の中村と申します。一昨年、先生の授業を受けた者なのですが、本当にこんな質問は変かと思うんですが、先生は今回の本の中で一葉はとても野心家だったと。それで生活のために小説を書いたんだというふうにお書きになっているんですが、その時代、こういう小説を書くことは、私たちはこういう小説を書くと売れるかなとか、うけるんじゃないかなとかと作家の人はそんなことを思って書いているのではないかと読む側が思うことがあるんです。『世界の中心で、愛をさけぶ』とかそういうタイトルを付けたりして。この当時の一葉さんというのは、『たけくらべ』とかを書いたら売れると思ったんでしょうか。

田中 思わなかったでしょう。たぶん桃水がどうやったら売れるかを教えてくれたと思うんです。しかし、きっとそのとおりにならなかったんですね。そういうふうにして小説を売って食べていきたいと思いながら、そのようには書けなかったんだと思います。ものを書いている人間はわかるんですが、ああいうふうに書きなさいとか、こういうふうに書きなさいと言われたから書けるというものではないんです。やっぱり自分の作品として書き始めたときに、書けないというのがわかったりする。結局自分なりにしか書けないんです。そういう現実に突き当たったと思うんです。

けれども一葉は、その現実のなかで格闘して書いたと思います。ですから、お金が欲しい、でも売れるとは思えないと思いながら、しかしそのな

かで格闘するしかなかったはずだと思っています。

司会者 ほかにありますでしょうか。

質問者 法政大学社会学部4年のイセキと申します。本日はありがとうございました。樋口一葉のことはあまりよく知らなかったんですけども、最近お札になっていますし、先日テレビドラマになっていて、なんでこんなにブームになっているんだろうと驚いていたんです。樋口一葉の当時の評価というか、なぜ受け入れられたのかというのをお聞きしたいんです。というのはドラマを見たときに、最後のほうのシーンで森鷗外が彼女を訪ねて、すばらしい作品だとおっしゃったというくだりがありました。売れると思わないで書いていたのではないかということですが、でも売れた、受け入れられたとしたら、樋口一葉の作品は当時の人に受け入れられた、人々を引き付けた要因がどこにあるのかをお聞きしたいと思います。

田中 私にとっては、こういう質問が難しい質問なんです。というのは、江戸時代のほうから見ていくわけですから、近代文学の社会状況、文壇状況についてよくわからないというのが正直なところです。当時は一般の人たちがたくさん買ったというものではないと思うんです。そうではなくて、露伴とか鷗外が評価した。非常に高い評価をしています。というのは、彼らは古典を知っています。ですから古典を知っている人たちの目から見たときに、それがどのように古典を打ち破って作られてきたかわかったんだと思うんです。その打ち破られ方がすごかった。もちろんいろいろな言葉で鷗外とか露伴は言っていますけれども、私なりの言葉で言い直すとおそらくそういうことだろうと思います。

ですから単におもしろいとかおかしいとか楽しいとかということではなくて、先ほど言いましたように、いろいろな象徴性がこのなかに込められていて、そして古典を知っていれば知っているほど、その重層性が見えてくるということは、当然当時の文学者たちは読んですぐに感じ取ったはずなんです。

近代文学というのは、最初のころおもしろいと思うのは、いろいろな近代文学があるんです。いろいろな出方をしているわけです。出現の仕方がさまざまです。二葉亭四迷のような現れ方、北村透谷のような現れ方、いろいろな出現の仕方をして、それぞれ違うんです。ですから、そのなかで一番だとか何だとかというそういう話ではなくて、一葉のようなかたちで古典を踏まえて近代文学にしていっていった人というのは、おそらくほかになかったんだと思います。そういう意味で、高い評価を得たと思います。

司会者 あとほかにありますか。では時間も押しているようですので、このへんで……。これは『樋口一葉「いやだ!」と云ふ』、集英社新書ですけども、僕が代わりに宣伝しましょう。あまりにおもしろかったので、読んでいて、僕は本当に目からうろこが落ちるというんですか、章によっては天地がひっくり返るくらいびっくりした。全く新しい一葉像だと思います。この本はたくさんの一葉の表情を様々なアプローチから見ることができる本だと思います。よろしかったらぜひ買い求めください。

田中 ありがとうございます。

司会者 では先生、今日はどうも本当にありがとうございました。(拍手)

(レジュメ)

一葉の真実——樋口一葉の可能性

2004.11.8 田中優子

簡単な年譜

- 1872 (明 5) 新暦 5 月 2 日, 内幸町に生まれる。
- 1883 (明16) 11歳 学校を退学。
- 1886 (明19) 14歳 萩の舎に弟子入り
- 1887 (明20) 15歳 長兄死去。一葉が家督相続者となる。
- 1889 (明22) 17歳 父, 事業に失敗して破産し, 死去。
渋谷三郎が婚約を破棄。
- 1891 (明24) 19歳 半井桃水より小説の指導を受ける。
- 1892 (明24) 20歳 小説の発表掲載が始まる。
- 1894 (明27) 22歳 2 月, 相場師になろうとして, 天啓顕真術会本部に
久佐賀義孝を訪ねる。妾になることを提案される。
『大つごもり』発表。
- 1895 (明28) 23歳 『たけくらべ』連載を始める。
『にぎりえ』『十三夜』など発表。
- 1896 (明29) 24歳 『わかれ道』など発表。11月23日没。

日本が300年ぶりに「対外戦争をする国」になったその時、一葉は独自の近代文学を生み出したのである。

1892年、伊藤博文内閣発足と同時に日本は「脱亜入欧」の植民地政策をとり、1894年、日清戦争に突入した。福沢諭吉はこの戦争を「文明と野蛮の戦争」と呼び、軍費集めにかけまわった。次の年に終結すると、日本は急速に「戦後経営」という言葉で軍備拡張に向かって行った。その後、さらなる軍備拡張をするために殖産興業の拡大、植民地経営、官界・財界へ

の人材養成のための教育編成などに精力的に取り組み、日露戦争に向かってゆく。

世の中は貧富の差が広がり、欧米を取り入れるために育てられた大学教育によるエリートと、教育のない大衆とに二分されてゆく。

「作られた知識人」＝欧米の知性を身につけた指導者、権力者＝「一番病」＝歴史の評価に基準があると思っている人＝前の時代を否定して乗り換えてしまう人＝上から降ってきた教科書をこなす人＝転向者

「作る知識人」＝学歴はないが自分の思想を作ってきた人々（鶴見俊輔）

『十三夜』に見る「いやだ！」の時代

「誠に申しかねましたが、私はこれで御免を願ひます。代は入りませぬからお下りなすつて」

「増しが欲しいと言ふのではありませぬ。私からお願いです、どうぞお下りなすつて。もう引くのが厭やになつたのでござります」

「御免なさいまし、もうどうしても厭やになったのですから」

「何が楽しみに轆轤棒にぎつて、何が望みに牛馬の真似をする。金を貰へたら嬉しいか、酒が呑まれたら愉快なか、考へれば何も彼も悉皆厭やで、お客様を乗せやうが、空車の時だらうが、嫌やとなると用捨なく嫌やになります。呆れはてる我まま男、愛想が尽きるではありませぬか」

一葉をめぐる3人の男性

渋谷三郎

もと婚約者、典型的な「立身出世」を遂げた高級官僚。検事となり新潟に赴任。新潟の水明楼の娘、ミツと結婚し水戸に赴任。後にドイツに留学してハイデルベルグ大学法学部に学び、離婚法で博士号取得。帰国後、妻の不倫で離婚。華族出身の女性と再婚し、秋田県知事、山梨県知事、早稲田大学法学部長を歴任。

「今かの人とは雲なき空にのぼる旭日の如く、実家は聞ゆる富豪の、い

よいよ盛大に成らんとするけしき。実姉は某生糸商の妻に成て、此家又300円の利潤ある頃といへり。身は新がたの検事として正八位に叙せられ、月俸五十円の榮職にあるあり。今この人に我依らんか、母君をはじめ妹も兄も、亡き親の名まで辱かしめず、家も美事に成立つべきながら、そは一時の榮、もとより富貴を願ふ身ならず、位階、何事かあらん。母君に寧處を得せしめ、妹に良配を与へて、我れはやしなふ人なければ路頭にも伏さん、千家一鉢（出家托鉢の意）の食にはつかん。今にして此人に靡きたがはん事なさじと思ふ。そは此人の憎きならず、はた我れ我まんの意地にも非らず。世の中のあだなる富貴榮譽うれはしく捨てて、小町の末我やりて見たく、此心またいつ替るべきにや知らねど、今日の心はかくぞある。」

半井桃水

一葉の小説の師。朝日新聞の記者で、新聞連載小説の作者。半井家は対馬藩主のご典医だった。その関係で桃水は12歳から釜山で働き、帰国後は英語を学び、新聞記者となる。朝日新聞の通信員として釜山に渡り、7年後に帰国して朝日新聞に新聞小説を連載するようになる。一葉と知り合ったころ、長編小説『胡砂吹く風』の連載が始まる。この小説の中で桃水は「日清韓」同盟を説いてみせるが、その裏にある日本・西欧のもくろみを見通すことはできなかった。むしろ、朝鮮半島への日本人の関心の上に立って、うまく生き抜いたジャーナリスト兼作家、といえるだろう。

「ある時は厭ひ、ある時はしたひ、よそながら物語ききて胸とどろかし、まのわたり文を見て涙にむせび、心諸みだれ尽して迷夢いよいよ闇かりし四十日にあまりぬ。……一日も思ひ出さぬことなく、忘るるひまも一時も非ざりし」

『胡砂吹く風』という痴史（桃水）が作をいたく愛でて、「夫より、行たしなどの念に成たるなめり」といふ。怪しう世にはさまざまの人

も有もの也けり」

久佐賀義孝

一葉があるときは相場師になろうとして、あるときは金を借りようとして飛び込んで行った、占い師を兼ねた詐欺的なコンサルタント業者。

「謂れなく貴姉に向て救助するときは貴女も之れを心善しとせざる事ならん……貴女の身上を小生が引受くるからには貴女の身体は小生に御任せ下さる積りなるや否や」(久佐賀よりの手紙)

「そもや、かのしれ物(ばか者)、わが本性をいかに見けるかあらん……あはれ笑ふにたえたるしれものかな。さもあらばあれ、かれも一派の投機師なり」

一葉の作品に登場する男性たち

藤本信如(『たけくらべ』)

酒と生臭物で太りきった父のありようや、金儲けのために簪を売る母、葉茶を売る姉などの家族に不潔を感じ、家を離れて僧としての勉強をしようとする。

田中正太郎(『たけくらべ』)

質屋の息子だが、母を亡くし、質屋をやっていた父は田舎へ逃げてしまい、金貸しの祖母と二人で暮らしている。裕福だが寂しく悲しい生活にたえている。

布団屋の源七(『にぎりえ』)

妻子がありながらお力に入れ込み、布団屋をつぶしてしまう。貧民窟で暮らしていたが最後は家族崩壊となり、お力と無視心中する。

高坂録之助(『十三夜』)

お関が嫁に行ったのち、放蕩して身を持ち崩し、結婚はしたものの子供は病死し、妻は実家へ帰り、ひとりで木賃宿に暮らしながら人力車を引いている。

山村石之助（『大つごもり』）

土地持ちの富豪の息子だが、家を出たきり、金の無心にしか帰らない。貧しい者たちを助け、一緒にふるまい酒を飲むのが好き。

傘屋の吉（『わかれ道』）

両親を知らない孤児。角兵衛獅子の団にいたところを傘屋に拾われ、職人として働いている。身体が小さく、人にかからかわれることが多い。

江戸からの読み直し

『たけくらべ』を、江戸の遊廓・芸能から読み直すと。

- * 当時の芸能がみわたせるミュージカル小説である。
- * 遊廓の華麗な世界が見える。
- * 「女の出世」の話である。→男も女も出世に幸せはない。
- * 女が男の恐怖を受け止める小説である。
- * 象徴に満ちた物語である。

『にがりえ』を、江戸の浄瑠璃から読み直すと。

- * 近松の心中浄瑠璃に酷似している。
- * 近世のエピソード小説の方法を駆使している。
- * それらを引き算したところに、近代小説が現れる。

『大つごもり』を、西鶴から読み直すと。

- * 「金につまる」ということの近代における意味が、具体的に見える。
- * それはもはや身分ではなく、土地を持つ者と持たざる者との違いである。
- * 金をめぐる人間像の面白さが読める（口入れのおばさん、山村の奥さんなど）。

一葉が成し遂げたこと

観 察

自己投入

現実の直視

象徴的表現方法

『たけくらべ』音曲リスト

そそり節

木遣り音頭

端 唄「しのふ恋路はさてはかなさよ 今度逢ふのが命がけ よごす涙のおしろいもその顔隠す無理な酒」

よかよか飴

大神楽

住吉踊り

角兵衛獅子

端 唄「わが物と思へば軽き傘の雪、恋の重荷を肩に掛け、妹がりゆけば冬の夜の、川風寒く千鳥なく、待つ身につつき置炬燵、ほんにやる瀬がないわいな」

仁和賀歌「北廓全盛見わたせば、軒は提燈電気燈、いつも賑ふ五丁町」（「男仁和賀福嶋中佐之内全盛歌」冒頭、「北海全道」替え歌）

新 内「かねて二人が取りかわす、起請誓紙はみんな仇、どうで死なんす覚悟なら、三途の川もこれ此様に、二人手を取り諸共と、なぜに云うては下さんせぬ。私を殺さぬお前の心、嬉しい様でわしや厭じゃ……わしや遣りはせぬ放しはせぬ、殺しておいて行かんせと、男の肩に食付いて、身を震はして泣きいたる。（「明烏夢泡雪」）

歌 沢「香に迷ふ、梅が軒端ににほひ鳥、花に逢瀬を待つ年の、明けてうれしき懸想文、開く初音のはづかしく、まだとけかねる薄氷、雪に思ひのふか草の、百夜も通ふ恋の闇、君が情の仮寐の床の、枕かたしく夜もすがら」

小学唱歌「廻れよ廻れ水車、流るる水のよどみなく、くるくる廻れ水車」

厄 介 節「わたしや父さん母さんに、十六七になるまでも、蝶よ花よと育てられ、それが曲輪に身を売られ、月に三度の御規則で、検査なされる其時は、八千八声のほととぎす、血を吐くよりもまだ辛い、今では勤めも馴れまして、金あるお方に使はする、手管手れんの数々は、恥かしながら床の中」